パネル発表「不登校傾向を示す児童への モルモット飼育による支援」

芳倉優富子＊　三本隆行＊＊

文部科学省は不登校児童生徒を「何らかの心理的，情緒的，身体的あるいは社会的要因・背景により，登校しないあるいはしたくとも出来ない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち，病気や経済的な理由による者を除いた者」としており，2011年度の全国の不登校児童生徒数は，小学校で22,622名，中学校で94,836名となっている（文部科学省，2012）．

不登校に至るまでの支援として，不登校傾向を示し始めた児童に対して学級での聞き取りや家庭状況の聞き取りなどから不登校の原因となるものを探し，その原因が少なくなるように環境を整えたり心理的ケアを試みたりと様々な手法でのアプローチがされてきた．不登校傾向を示す児童の中には，対人コミュニケーションの弱さや日常生活場面での状況把握の弱さ等を持つ児童も多く，不登校傾向を示してから発達障害と診断される児童もいる．これまで通級指導教室の指導対象の中に不登校児童は含まれていなかったため，発達障害と気づかれないまま不登校が長期化するケースもある．発達障害との関係を十分に考慮しながら不登校傾向を示し始めた早期への対応が不可欠であると考える．

発達障害との関係をもつことも

- 不登校になってから診断される児童も
- 通級指導教室の役割
  相談と指導
- 通級指導教室と適応指導教室との連携
- 保健室との連携

不登校傾向児童

- 対人関係の弱さ
- コミュニケーション力の弱さ
- 生活場面の状況把握の弱さ
- 不登校傾向から発達の問題に
- 愛着形成の弱さ

２年間不登校となり適応指導教室からの依頼で通級に繋がってきた児童は，不登校になってから発達障害と診断されている．通級指導教室と適応指導教室との連携で１年後に登校できるようになった事例もあり，発達障害を持つ不登校児童への支援において通級指導教室が果たす役割があるのではないかと考える．

ステップ教室

- 通常の学級に在籍する児童が、それぞれが持つ困難さを軽減し、生き生きと豊かな学校生活を送るための指導や支援を行うことを目的とした教室

香芝市全域と近隣の市から44名の児童が通級(H27. 8現在)

《対象児童》
自閉スペクトラム症
ADHD
学習症（読み 書き・算数など）
診断は、無いが同様の困難さを持つ

ステップ教室は，「ＬＤ・ＡＤＨＤ等通級指導教室」として平成１９年に設置された通級指導教室である．香芝市を中心に約40名の児童が通級している．

不登校傾向を示す児童への対応として，数か月間不登校であった小学5年生の女子児童が，特別支援学級でモルモットを飼育していることを知り，朝から下校時までモルモットと過ごすために登校するようになったという報告がある（三本2009）．

モルモットは臆病で神経質な動物であるが，やさしくゆったり接し続ければ人間にも慣れ，ウサギよりも性格はおとなしく，体重も軽いので児童にも扱いやすいとされる．

動物が子どもに与える影響として，山崎（2009）はモーチベーター（「動物に触れたい」「動物と仲良くしたい」という動機づけとなる），コーディネーション（自分の体の適切な使い方やバランスを保つこと．特に，小さい動物に触れたり抱いたりする際，微妙な力加減を無意識に習得する），言語発達（動物を目にすることで自然に発言をするきっかけとなる），集中力（動物は注意の焦点になりやすく，テレビゲームや玩具などの趣味や興味の壁を越えて子どもをひきつけ，その集中力を高める），社会性（言葉を使わない動物と接することで，非言語的コミュニケーションが上手になり，ボディ・ランゲージを発したり読み取ることができるようになる），セルフケア（動物を世話することで，自分自身の身の回りのことを整え，正しい生活習慣が身につく），自尊心（弱者である子どもが，さらに弱い動物を飼養管理することで，動物が快適そうに過ごし，周囲の人間から褒められる．これが達成感につながり，自尊感情を強くする．動物の健康状態や感情を気遣いながら世話することで，自己の価値を見出す），コンパッション（動物を受け入れ共感することで，動物に対して優しく親切になることができる．さらに，人間に対しても同様の対応ができるようになる），という8項目を挙げている．また，中川(2003)は，学校で飼育される動物の存在が，飼育動物に愛情を持っている児童にとって，緊張感を弛緩させ，人間関係の改善に影響すると述べている．

多くの小学校では，屋外の飼育舎にウサギやニワトリを飼育し，飼育委員会等がその飼養管理を行っている．また，児童個人での飼育は難しく，集団活動組織が必要である．そこで，教室全体で育てるという形をとりながら，児童にはモルモットの飼育という役割を与え登校刺激に繋げていく．さらに，弱い動物と思っていたモルモットが成長して行く事で，その成長を児童が支えているという感覚を体験し，自分自身の価値を見直すきっかけを与える．

以上を参考に，不登校傾向を示し始めた児

童へのアプローチの一つとしてモルモット飼育を通して学校での居場所，心の安定，学校での役割と登校する意味を確認させ，登校につながった具体的な事例をパネルで紹介する．

登校の動機づけ

- 学校や教室へ行くのは…
- あまり人のいない通級指導教室なら…
- モルモットの「ルリー」がいるから
- ルリーは、そのままの自分を受け入れてくれる存在
- ルリーが待っていてくれる
- 自分が役立っている？

事例A（女児）

- 3年生時に登校渋り
- 保健室で対応していたが、2学期に登校できない日が…
- 11月から生後40日のルリーを育てる
- ルリーが来た日から登校できるようになる
- 母とえさ探し、休日は家で世話を
- 獣医さんとのつながり
  - ＊世話の仕方を教えてもらう
  - ＊わからないことを聞こう

Aさんにとってのモルモット

- 心理的に不安定なSさんを無条件に受け止めてくれる存在⇒心の安定
- 「育てる」ことを通してSさんの母性の育ち
  ⇒母から離れても…
- ルリーを介して母との関係を確認
  エサの草探しや家での世話を母と二人で
  母との特別な時間

心の安定と自尊感情の高まり

事例B（1年男児）

- 本児1歳半時から母親入院（植物状態）父とも離れて暮らす
- 入学後、登校しぶり⇒5月連休明けから不登校に
- 担任にも会わない、家から出ない
- 祖母に赤ちゃんのように甘える
- 学校のことをいうと怒るようになる
- 長期的な不登校になる可能性を危惧

登校刺激として

- 学校に手続きに来たときに…チャンス！！
- 祖母が手続きをしている間教室と「ルリー」の所へ誘う
- 少しの間、ルリーにえさをやったりなでたりする
- 「また、えさをやりに来てね」
- 週に1回、放課後登校することに
- 「ルリーちゃんも待ってるよ」「えさをやりにいこうね」（祖母）
- 放課後、担任と祖母と一緒に

《活動が広がる》

- ルリーにえさをやる＋ステップ教室で遊ぶ
- ルリー＋遊ぶ（体育館・1年教室）担任でなくても大丈夫
- ルリー＋勉強＋遊ぶ

Bくんにとってのモルモット

- 不安な環境に置かれたBくん
  受け止めてくれる存在⇒心の安定
- 心配だらけの未知の「学校」という場所とBくんをつなぐ
- 祖母との愛着形成のやり直しの時に
  Bくん⇔ モルモット⇔ 祖母
- 家で 「このにんじん、ルリーちゃん食べるよ」
  「今度、学校に持って行くから袋へ入れとく」

Bくんにとってのモルモット

- **2学期から祖母と登校**
- **登校してからも、教室で疲れたときに「ルリーちゃん行こう」が合い言葉**

- 自尊感情の高まり
- 自信の回復
- 兄弟や友達の役割
- 愛着形成（祖母との）の確認作業の仲立ち

事例C（4年女児）

- 3年生の2学期頃から登校が遅くなる
- 3学期には、玄関から出ない
- 学校に着いてもお母さんから離れない
- 4年生から教室に行けなかったらステップ教室に
- ルリーちゃんの世話をお母さんと一緒にする
- クローバーを登校途中の土手でとってきてくれる
- お世話をする様子から見えてきたこと
  母の関わりの仕方・本児の特性
- 4年生で発達障害であることがわかる

教室へのワンステップ

- 登校しても教室へは行けない
- ルリーちゃんの世話をしにステップ教室で
- 飼育箱の掃除、えさやりを母と共に
- 1時間から2時間ステップ教室で過ごし、教室へ
- 本児なりのコミュニケーションの相手
- 少しずつ教室での心配ごとを話してくれるように

Cさんにとってのモルモット

- 自分のままでいても受け入れてくれる
  ⇒気持ちの安定

- 自尊感情の高まり
- 自信の回復
- 母との関係の回復

学校や教室へ入ることに難しさを持つ児童がモルモットと出会うことで，学校や教室への抵抗感が少なくなる．何らかの弱さを持つ児童達にとってモルモットにえさをやり世話をすることは，そのままの自分を受け入れてくれるように感じ，自信を回復していくのではないだろか．モルモットがその児童達の困難さを軽減してくれる訳ではないが，それぞれの困難さに向かう為のきっかけや精神的安定を与えてくれるものである．

【参考・引用文献】

三本隆行（2009）特別支援学級での動物飼育実践と保護者の反応．10，32-34．全国学校飼育動物研究会.動物飼育と教育.

文部科学省（2012）統計情報：児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（届出統計）．文部科学省.

中川美穂子（2005）学校飼育動物と生命尊重の指導 教職研修総合特集．157，42-45，教育開発研究所.

清水宏子（2008）やさしいエキゾ学．51,インターズー.

山崎恵子（2009）飼育動物が子どもに与える影響．小児科臨床，62，573-578，日本小児医事出版社.

（＊香芝市LD・ADHD等通級指導教室）
（＊＊帝塚山大学心理学部心理学科／
（公社）奈良県獣医師会）